医療によって，病気を治したり死期を先延ばしたりすることはできても，死から免れることはできない．富士川は医療の限界を凝視し，医療に携わる者は仏教的素養を身につけるべきである，とする立場を取っていた．富士川が指摘するように，これまでの仏教の長い歴史の中では，病や死への恐れをいかに超克するかが課題とされてきた．中世に医師と僧（と陰陽師）が共同で行ってきた医療は，現代では劣った医療であるかのように見なされがちだろう．しかし，これを非科学的であると一蹴するのではなく，現代においてその意義こそを顧みるべきなのではないだろうか．

本書は，医学史研究のパイオニアである富士川游を顕彰するのみならず，安芸門徒としての富士川を論じることによって，現代の医療，さらには現代社会に大きな問いを的確に投げかけている．これからの医療はいかにあるべきか，医療者はどのように患者に向き合うべきなのか，現代の医療でなおざりにされている諸問題への解決の手がかりが，本書には凝縮されていると言えるだろう．

（小山　聡子）

［本願寺出版社，〒600-8501 京都市下京区堀川通花屋町下ル，TEL. 0120（464）583，2021年10月，B6判，236頁，1,600円＋税］

東京国立博物館 編
『日本最古の医学書　国宝「医心方」の世界』

本書は副題に「全巻修理完了記念」のタイトルを冠し，令和4年（2022）2月8日～3月21日に東京国立博物館本館特別1・2室で開催された特集展示「全巻修理完了記念 日本最古の医学書 国宝『医心方』の世界」の図録として刊行された書である．

丹波康頼（912～995）は982年に『医心方』全30巻を編集し，984年にこれを時の円融上皇に献上したと伝える．日本現存最古の医学書であり，質も量も優れ，現存品も執筆当時に近いものが伝来する．

伝存古写本には複数の系統があるが，平安時代の古鈔に半井家本と仁和寺本の2系統があり，いずれも国宝に指定されていている．国宝指定の医薬書はいくつかあるが，日本人の著作で国宝に指定される医書は『医心方』が唯一である．仁和寺本は6分の1の5巻分しか現存せず，書写の古さからしても全30巻が揃っている点からも，半井家本は最善本として計り知れない価値を有している．

朝廷に献上された『医心方』は秘蔵されたのち，正親町天皇（在位1557～86）のとき半井瑞策（光成，1507～77）に下賜され，半井家に秘蔵．幕末の1854～62年に一時影刻出版のため幕府医学館に貸与されたのちも再び半井家に蔵されたが，編纂から千年後の1982年に国・文化庁に譲渡され，撰進一千年の1984年に国宝に指定された．わが日本医史学会は日本東洋医学会・東亜医学協会と計り，これを記念して同年10月10日，京都泉涌寺内今熊野観音寺の医聖堂において盛大な式典を催したものである．あれから40年近い歳月が経過した．

1990年には管理が国から東京国立博物館に移り，東博本とも称されるようになった．2015年，東京国立博物館は独立行政法人国立文化財機構に寄せられた寄附金を原資とする文化財保存活用基金によって『医心方』修理事業に着手．修理は一般社団法人国宝修理装潢師連盟加盟工房の株式会社半田九清堂と株式会社修護が担当し，足掛け5年，1億3700万円の費用をかけて完成した．

本書には，序論として冨坂賢（東京国立博物館）「刊行にあたって」，総論として冨坂賢「東博本『医心方』とはなにか」，特論として佐伯勇成・下田純平（半田九清堂）「東博本『医心方』の修理について」の記述がある．装潢師による特論はカラー図版を多数用いて修理の具体的過程を説明しており，その様子がよくわかる．

本書の特徴は後半3分の2の頁を割いて満載されるカラー図版篇にある．「『医心方』30巻1冊」

の部では，全30巻1冊の巻頭部分がすべて掲載されている．次いで「附 江戸幕府借用関係文書」，「明治以降半井好和関連文書」，「『医心方』裏書」，「『医心方』紙背文書」のカラー図版がある．これらの鮮明な図版は今回初めて公開されるものばかりで，大いに参考になる．評者はとくに『医心方』裏書に興味が惹かれ，いくつかの新知見を得ることができた．コラムとして冨坂賢「『医心方』巻第八『天養二年加点識語』について」と國分梓（郡山市文化振興課）「東博本『医心方』の背記」について」の記述も挿入されている．

ともかく表紙からしてカラー図版が満載．国宝『医心方』好きは図版を眺めているだけでも楽しい時間が過ごせる．図版と添えられた翻字を対比しても何か気付くかも知れない．

（小曽戸　洋）

［東京国立博物館，〒110-8712 東京都台東区上野公園13番9号，TEL. 03（3822）1111，2022年2月，A4判，156頁，3,000円＋税］

岸本良彦 訳注
『ディオスコリデス 薬物誌』

2022年には，古代ギリシア・ローマの植物学・薬学に関する書物が相次いで出版される．京都大学学術出版会（西洋古典叢書）からはテオプラストス『植物誌』（小川洋子訳）の最終分冊に加え，ケルスス『医学について』（石渡隆司・小林晶子訳）も出版される予定である．こうした流れの先陣を切って出されたのが，今回のディオスコリデス『薬物誌』である．

ディオスコリデスは紀元後1世紀キリキアのアナザルブスに生まれたとされる医師である．ギリシアや小アジアなど各地を遍歴し，多くの薬草・薬物を収集し，『薬物誌』を著した．『薬物誌』のギリシア語原題の直訳は『医学材料について Περὶ ὕλης ἰατρικῆς』という．現存する最古写本には単に『材料について Περὶ ὕλης』という題名が付されているが，元々は題名のない著作であった可能性が高い．紀元後65–75年頃に書かれたものと推定されている．

ヨーロッパではディオスコリデスが，テオプラストスやガレノス以上に好んで読まれ，15世紀以降，繰り返しラテン語で出版され，医薬書の権威となった．ルネサンス期以後の著名な植物学書，例えばオットー・ブルンフェルス（1488–1534）の『薬草写生図譜』やレオンハルト・フックス（1501–1566）の『薬草誌』もディオスコリデスの記述に多くを負っている．また，アラビア医学との関係ではイブン・スィーナー〔アヴィセンナ〕（980–1037）の『医学典範』にはディオスコリデスを典拠とした記述が多数含まれている．ディオスコリデスの『薬物誌』は，ヨーロッパ植物学・薬学の源流とも言うべき重要な著作である．

この書の翻訳として，日本ではこれまでエンタプライズ社の『ディオスコリデスの薬物誌』（鷲谷いづみ訳）が一般に用いられてきたが，この翻訳の底本は1655年にJohn Goodyerが英訳したものをさらにRobert Guntherが校訂したものであった．日本語訳はこの英訳からの重訳という原典からは程遠いもので，また参照項の番号が異なることも相まって，研究者が使用するには甚だ不便な本であった（さらに大判で持ち運びには不向きで，価格も高く，市場への流通も非常に少ないという難点もあった）．今回出版された岸本良彦氏による翻訳はMax Wellmannのギリシア語校訂本を底本としたディオスコリデス『薬物誌』の日本初のギリシア語原典翻訳である．

本書の底本であるWellmannの校訂本について，若干補足をしておくと，これは1906–1914年にかけて出版されたもので，全5巻（3分冊）に及ぶ．現在われわれが利用できる比較的信頼度の高い校訂本の一つである．「比較的信頼度の高い」という言い方をしたのは，近年John Riddleの研究により，Wellmannが写本校合で特に依拠した諸写本と